

# シュッコンカスミソウのつぼみ切りにおける採花時の 開花ステージが花持ちに及ぼす影響

## 1. はじめに

本県のシュッコンカスミソウ（以下カスミソウ）の出荷期間は、10月から翌年6月までと長期間です。低温期は第1花が開花してから、収穫適期の切り前に達するまでに多くの日数を要するため、先に開花した小花が早く萎凋します。一方、高温期は開花の進行が早く、収穫時点ですでに萎凋花が発生し、切り花品質を低下させています。この対策として、つぼみ切りの有効性が報告されています。

ここでは、各開花ステージごとにカスミソウを収穫し、糖と光を与えながら出荷適期まで開花させた切り花と慣行の方法で収穫した切り花の花持ちを調査しました。

## 2. 試験方法

2007年5月11日に開花率が2、10、15、20%の段階で収穫したカスミソウ‘雪ん子’（70 cmに調整）を0.2mMSTS、3%ショ糖および抗菌剤（200ppm8-HQS）を含む前処理液に生け、15℃で21時間処理しました。その後4%ショ糖と抗菌剤を含む溶液に生け、光強度 $30 \mu\text{mol} \cdot \text{m}^{-2} \cdot \text{s}^{-1}$  蛍光灯連続照明下、室温 $22 \pm 1^\circ\text{C}$ の条件下で開花率が30%に達するまで保持しました。これらの切り花を前記の溶液に生けた状態で $12^\circ\text{C}$ 、24時間の輸送シミュレーションを行いました。その後蒸留水に生け替え、室温 $23.0 \pm 0.5^\circ\text{C}$ 、相対湿度30~50%、光強度 $10 \mu\text{mol} \cdot \text{m}^{-2} \cdot \text{s}^{-1}$ 、12時間照明の条件下で花持ちを調査しました。また、慣行区として、同年5月13日に開花率30%で収穫し、市販の前処理剤（クリザールかすみ20倍液）で20時間処理し、1%ショ糖溶液で同様の輸送シミュレ

ーションを行う区を設けました。

## 3. 試験結果

各区の切り花は、2%区で4日後、10%区で3日後、15%区で2日後、20%区で1日後に30%以上に達しました。輸送シミュレーション後の切り花重は、いずれの区においても直後から増加し、10、15、20%区では、輸送後3日目までその傾向が続きました。一方、2%区および慣行区では、輸送後2日目を過ぎると急激に低下しました（図1A）。開花率も同様に、いずれの区においても輸送後に高まり、10、15、20%区では、5日目まで増加し最大で75%に達しました。しかし、2%および慣行区では、4日目に60%まで高まりましたが、その後減少しました（図1B）。萎凋花は、10、15、20%区では、輸送後5日目までほとんど発生しませんでした。一方、2%区では4日目から、慣行区では輸送直後からわずかに発生が認められ、日数が経過するにつれ徐々に増加し5日目には急増しました（図1C）。

## 4. まとめ

カスミソウを慣行より早い開花ステージで収穫し、光強度 $30 \mu\text{mol} \cdot \text{m}^{-2} \cdot \text{s}^{-1}$ 下、ショ糖溶液等で開花させた切り花は、慣行の切り花よりも、開花数が多く、萎凋花の発生時期が遅れました。また、このときの収穫時の開花ステージは開花率10~20%が適すと考えられました。

（園芸部 宮前治加）

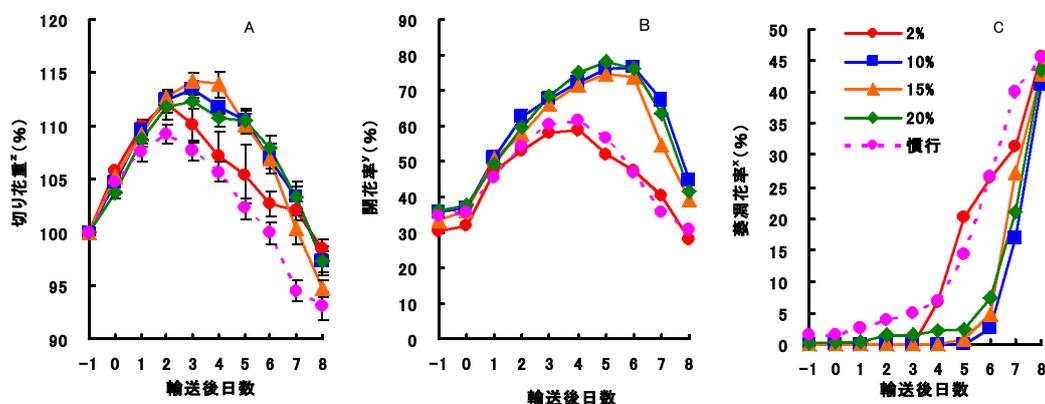


図1 各開花ステージで収穫後、出荷適期まで開花させた切り花の輸送後の切り花重 (A)、開花率 (B) および萎凋花率 (C) の推移

<sup>z</sup> 輸送シミュレーション前を100とした値 <sup>y</sup> 全小花数に占める萎凋していない開花小花の割合

<sup>x</sup> 全小花数に占める萎凋した小花数の割合